

2010年度 立教SFR国際会議助成成果報告書 (A, (B) C)

1. 会議概要

会 議 名	和文	立教大学国際経営会議「グローバル・ビジネスの次のステップへ：挑戦と機会」(ただし、正式名称は欧文のみ)		
	欧文	Rikkyo University International Business Studies Conference Next Chapter of the Globalization of Business: Challenges and Opportunities		
主 催	立教大学経営学部			
共 催	立教大学経営学部 BBL 立教大学経営学部 BLP			
後 援				
開催責任者	所属	経営学部		
	氏名	尾崎俊哉		
運営事務局	事務担当者	経営学部		
	氏名	石川淳		
開催期間	2010年5月21日から2010年5月22日まで			
開催場所	立教大学池袋キャンパス			
参加者数※1	学内	12名		
	学外 国内から招聘	2名		
	海外から招聘	14名	8カ国	合計 28名 9カ国
公開講演会等 参加者数※2	②	2010年5月21日	209名	カ国
	②	2010年5月22日	24名	カ国
開催日程		午前	午後	夜
	第1日 5月21日		15:00~17:00 シンポジウム打合せ 18:30~20:00 公開シンポジウム	20:00~22:00 研究報告会打ち合わせ
	第2日 5月22日		10:00~16:30 研究報告会 12:25~13:45 打ち合わせ	
開催経費総額	予算額	2,777,600円	執行額	1,288,651円

※ 1 参加者とは、会議において講演、パネラー、コメンテーター等の活動を伴う者をいう。

※ 2 一般に公開された講演会等に聴講のために参加した者。講演者、パネラー等は除く。所要経費が60万円以上の会議で参加者がのべ100人を超える場合は、参加者名簿を添付すること。

2. 開催趣旨概要

(1) 開催目的及び意義(学術上の意義、開催経緯、立教大学主催・共催の意義を含めて、具体的に記入すること)

米国ペンシルバニア大学教授の Steven Kobrin 博士をシンポジウムの基調講演者としてお招きし、グローバル・マネジメントに焦点を当てた国際会議を開いた。

バブル経済の破綻以後、多くの日本企業は国際的な競争力を失い、これに伴って、それまで世界的に注目されてきた日本型マネジメントに対する注目も低下するようになった。さらに、日本企業は、その後続く、いわゆる「失われた 10 年」の間に、自らのマネジメントに対する自信を失っていった。

一方、業績が好調な米国企業は国際的な競争力を増し、そのマネジメントが、欧米企業はもとより、韓国、中国、インドといった新興国における企業においても、積極的に取り入れるようになった。これに呼応するように、日本企業においても、成果主義賃金制度に代表される米国企業的なマネジメントの導入が検討されるようになってきた。

しかし、昨年のリーマン・ブラザーズ破綻に起因する世界同時不況は、米国型のマネジメントに一定の限界があることを世界中の企業に知らしめることとなった。このため、マネジメント研究においても、地域文化に立脚しつつも、グローバルな場面で自社の競争優位が発揮でき、さらに、持続的成長が可能なグローバル・マネジメントに関する研究が、これまで以上に求められるようになってきた。

グローバル・マネジメントについては、これまでも様々な研究が行われてきた。しかし、これまでの研究の多くは、その対象が欧米企業であり、主導的な役割を担っている研究者も、欧米の大学・研究機関に所属している者がその中心であった。しかし、近年、中国、インドなどのアジア企業に焦点を当てた研究も多く行われるようになり、また、研究者についても、アジアの研究者が盛んに国際会議で活動するようになってきた。

日本においても、徐々にグローバル・マネジメントに関する研究は行われるようになってきたが、アジア各国と比較して、日本の大学・研究機関に所属する研究者の国際会議での活動は目立っておらず、また、日本において国際会議がほとんど開かれていないのが現状である。

しかし、日本企業は、欧米企業と比較して、「人」を経営の重要な戦略的資源として重視し、彼らのコミットメントやモチベーションを適切に引き出すマネジメントに長けている。このため、現在においても、日本型マネジメントの優れた点は、世界中の研究者に注目されており、日本におけるグローバル・マネジメント研究に対する期待度は高い。

そのような中で、日本の大学が国際会議を開催し、日本発の研究を世界に向けて発信すると同時に、世界の研究者が来日し、彼らの研究成果を発表する場を提供することは、日本のマネジメント研究の発展のみならず、世界のマネジメント研究の発展に大いに寄与すると考えられる。実際に、多く海外研究者が、日本における国際会議の開催を強く望んでいる。

このようなニーズに対応して、本学経営学部は、昨年度、Academy of Management の会長経験者であり、マネジメント分野の世界的権威である Richard Steers 博士 (Oregon 大学名誉教授) をお招きして、国際学会を開催した。これにより、本学における会議の世界的認知度を高めることができた。これに引き続き、本年度も、Steven Kobrin 博士をお招きして国際会議を開くことが、グローバル・レベルでの立教大学の認知度向上に大きく寄与すると考えられる。

Kobrin 博士は、世界でトップクラスのビジネス・スクールである Pennsylvania 大学 Wharton 校の教授で、国際経営学分野では最も権威の高い Academy of International Business の会長経験者でもある。Kobrin 博士の専門分野は、グローバル企業の経営戦略で、とりわけグローバル企業のリスク・マネジメントや社会的責任と経営戦略の関わりについての研究では、世界で最も著名な研究者といえる。そのような Kobrin 博士に、シンポジウムで講演をしていただくことは、グローバル企業の経営戦略およびマネジメントに関わる最先端の研究を、本学教員・学生だけでなく、学外の一般の人たちにも伝えることができる重要な機会となる。

一方、2日目の研究発表会は、Kobrin 博士を始め国際経営学分野のトップクラスの研究者にパネル・ディスカッションに参加していただくと同時に、世界に向けて発表論文の募集を行い、査読によって報告論文を厳選した。これにより、質の高い研究報告会を実施することができ、対外的にも、立教大学の国際経営学分野の研究レベルの高さをアピールすることができた。

他の大学・研究機関に先駆けて、立教大学でこのような国際会議を開催することは、日本におけるマネジメント研究において大きなファースト・アドバンテージを得ることができ、研究成果を世界に発信することができる大学として、国内外にその地位を確立することができる。このため、今回の国際会議は、立教大学経営学部が、マネジメント研究において国内外でイニシアティブをとることに大きく寄与したと考えられる。

3.国際会議の成果概要・今後の展望等

1. 成果概要

本国際会議は、大きくシンポジウム（5月21日実施）と研究報告会（5月22日実施）の2つのパートに分かれる。それぞれについて、以下の通り実施された。

1)シンポジウム

Kobrin 博士による基調講演による基調講演が行われた。タイトルは「Why Globalization Makes Multilateralism More Important and Harder to Achieve」である。基調講演の中で、グローバル環境に言及しながら、グローバル企業の経営戦略やマネジメントに関わる課題と展望について、最新のデータや事例を用いながら語っていただいた。出席者は合計で211名で、その内訳は、招待者7名、本学教職員12名、学生150名、一般42名であった、

出席者には、フィードバック用紙を配布し、当該シンポジウムの評価を自由記述してもらった。回収率はそれほど高くなかったが、回収されたフィードバックの全てが、肯定的な評価であった。以下は、自由記述による評価の一部である。

- ・「これからの世界の流れを考えるにあたり、大変参考になりました。大変勉強になる講演会でした。」(会社員)
- ・「グローバルなしや、空気を読む(調和)、リーダーシップなど、貴学部の掲げた方針と一致した素晴らしいシンポジウムでした。来年も是非参加したいと考えています。」(会社員)
- ・「本当にためになりました。とても良いシンポジウムでした」(自営業)
- ・「とても良かったです。幅広い参加者が来場したシンポでした。立大生のレベルの高いQ&Aが印象的でした。」(会社員)
- ・「今までの自分にはなかったグローバルな視点を持つきっかけになったと思います。」(本学経営学部学生)
- ・「グローバル化の中に潜む根本的な問題をわかりやすく説明してくださり、さらに研究してみ

ようと思いました。」(本学経営学部学生)

- ・「大変貴重なお話だったと思うのだが、英語をよく聞き取れない自分にとって、事前にいただいたプリントを何とか理解することしかできなかつた。お話をよく理解できない自分を悔しく思った。もっと英語を勉強して、来年にはもっと理解できるようにしたい。」(本学経営学部学生)

上述の通り、学内外の出席者に対して、知的な刺激を与えることができた有意義なシンポジウムになったと考えられる。さらに、招待者の中には、元経済同友会代表幹事の北城格太郎氏など経済界で発言力を持った方や、Aberystwyth 大学 教授の Steven McGuire 氏など、国際経営学分野で世界的に著名な研究者も含まれていたため、立教大学の発信力に対する対外的な認知度が高まったと考えられる。

2)研究報告会

国際経営学に関わる最先端の研究について、パネル・ディスカッションおよび研究報告が行われた。招待報告者および本学教員を除き、報告者は全て査読プロセスを経て採択された論文だけが報告された。投稿に対する採択率は50%であった。この率は、トップ・レベルの国際学会と比較すると高いが、国内学会の平均採択率を下回る率である。昨年度に引き続き実施していること、および Kobrin 博士を始めとするトップ・レベルの研究者が参加していることもあり、投稿された論文全体のレベルも高く、なおかつ、その中で最も優れた論文を採択することができた。その意味で、非常に高いレベルの研究報告会となったと言えよう。実際に、報告者および出席者の多くから、次年度も引き続き開催して欲しい旨要望を受けた。

なお、出席者は合計で46名であった。学術目的であったため、一般には公開しなかったため、比較的参加者が少なかった。また、外部の報告者は9ヶ国16名で、本学からは7名の教員が報告した。なお、報告者、報告タイトル等は付属資料の通りである。

2.今後の展望

シンポジウムおよび研究報告会ともに、出席者からの評価が高く、今後も引き続いて開催して欲しい旨多くの要望が寄せられた。このため、経営学部として、次年度も同様の国際会議を開催する予定で準備を進めている。このような国際会議を、本学主催で定期的に開催することは、本学の研究レベルの向上だけでなく、本学の知名度を対外的に、特に、グローバルに広めるために有効であると考えられる。その意味で、今年度の国際会議は、今後の定期的開催につながる重要な役割を果たしたと言えよう。

また、本国際会議の開催によって、あらためて、学部内でも研究を重要視する風土が刺激され、若手研究者を中心に、英語による定期的な研究報告会が始められることとなった。さらに、本国際会議は、海外でも高く評価され、この国際会議を出発点に、国際的な研究プロジェクトが立ち上がることとなった。これに加えて、本国際会議の結果に基づいた書籍をイギリスにおいて出版する計画も進行中である。

総じて、本学の研究レベルの向上、対外的な認知度の向上、さらには、研究成果の社会への還元という意味で、大きな成果を残した本国際会議は、今後も、引き続き、本学経営学部が、経営学研究において、国内外で主導的な役割を果たしていくための促進剤となったと言えよう。

4. 会議の構成

(1) 学内参加者

氏名	所属・職名	会議における活動	内訳
井口知栄	経営学部助教	・シンポジウム司会	経営学 12名 その他() 計 12名
Johns, Adam	経営学部助教	・パネル・ディスカッション	
松永正樹	経営学部助教	・自由論題報告座長	
三木朋乃	経営学部助教	・自由論題報告	
森永雄太	経営学部助教		
佐々木宏	経営学部教授		
柴田舞	経営学部助教		
白石典義	経営学部教授		
鈴木秀一	経営学部教授		
山口和範	経営学部教授		
尾崎俊哉	経営学部教授		
石川淳	経営学部教授		
変更内容 (氏名、不参加/追加の別)			

(2) 学外参加者 (国内、国外)

氏名	国名・所属・職名	会議における活動	内訳
Steven Kobrin	H. Wurster Professor of Multinational Management, Wharton School of Business, University of Pennsylvania, USA	・基調講演 ・自由論題報告での座長	国名 1名 日本 2名 英国 1名 米国 3名 韓国 2名 台湾 1名 フランス 1名 デンマーク 1名 オーストラリア 4名 オランダ 1名 計 9カ国
Jean Marc Blanchard	San Francisco State University	・自由論題報告および座長	16名
Anthony D'Costa	Copenhagen Business School		
Brian D'Netto	Australian Catholic University		
Fabian Jintae Froese	Korea University		
Xueli Huang	Edith Cowan University		

Stephen J. Kobrin	University of Pennsylvania		
Yung-Chul Kwon	Yeungnam University		
Ferdinand C. Maquito	Sekiguchi Global Research Association		
Steven McGuire	Aberystwyth University		
Vesa Peltokorpi	HEC Paris		
Thắng Phạm	Edith Cowan University		
Keikoh Ryu	Waseda University		
Jie Shen	University of South Australia		
Roblyn Simeon	San Francisco State University		
Chih-Wen Wu	National Chung Hsing University		
Thu-Hà Trinh	University of Maastricht		